玉翠俳句王

にくの会・誌上句会

毎月九日
お肉でも
食しながら、
俳句を二句ほど
ひねろうか

宗匠の句

花御堂眠りたき子のあたたかし
火は遠く旅して来たる盆用意
千の手の静かな千に降る初雪
●S47 卒　対馬康子

小春日にねむりこけたり本の虫
是非も無しこの冷たさも彼岸まで
癌を病んで花巡り来る山河あり
●S33 卒　大西無郷

岩煙草水滲み出る崖に這ふ
虫の音にふと目を閉じる躑躅
鎌倉のどの径ゆくも小春かな
●S38 卒　田阪千十

散りぎわに少し紅差す桜かな
お茶事とて野良で田植を一休み
ゆずり葉の繁れる家に人も無し
●大西千女

ウインドで沈してふるえる春の海
しだれ桜友と語らう学生時代
いくとせを雨戸は見たか庭の春
●S43 卒　小島豊優

立秋のなお熱き路上蝉むくろ
島並みに陽の影ゆらり瀬戸の春
龍神が吼えるがごと冬能登海
●S34 卒　頼則紗頼

蕗の香を楽しむ齢となりにけり
ふりむけば香りきわだつ花蜜柑
様々に貝とりあわせ雛の膳
●S45 卒　井上まき女

鶯宿梅木々は山野にあればこそ
大川に舟を浮かべて花の春
はまぐりは黙座したまま詩人なり
●S37 卒　岡崎洋々

朝露の夢想は徐々に崩壊す
猫の欠伸を我も真似して日脚伸ぶ
雪解けにその名も知らぬ黄花咲く
●S47 卒　佐々木松翠

父の歳超えて今日は立春かな
春の野にソフトクリーム二つかな
突然に海あらわれて春近し
●S47 卒　土居六条

賑わいて白狐もおわす初句会
年越しの古刹にしんと笑み満る
ユトリロの白や凍れる滝の色
●S52 卒　白川夕帆

雪を掻く音重なりし朝(あした)かな
艶やかに桜の幹や春きざす
節太き指にも指輪額の花
●S47 卒　原久美子

春眠やダリの時計の溶けはじむ
色うすきバッタの子あり秋の風
子守歌思い出せずにわたの花
●S52 卒　松田欣女

林道にまっすぐに落つ春驟雨
面影の母の笑顔や釜始
冬晴れや心の憂さもおき忘れ
●S49 卒　高桑南菜

素うどんに小ねぎ二さじ夏座敷
紙袋抱えて走る驟雨かな
夏の海彼方に異国有りと老母
●S52 卒　安川文旦

犬とゐる世の片隅や葱の花
空蟬に母なる幹を得しかたち
北向く子南へ向く子天の川
●S50 卒　坂田光義

たんぽぽを小さき靴は避けにけり
「のうのう」の故郷の音の春の感
三尺寝無理も手抜きもなき人生
●S53 卒　長尾らいむ

夕星の光くぐれる茅の輪かな
龍潜む淵に懸かるや夜の虹
侘助や闇と手燭のあはひにて
●S50 卒　豊澤壊殻

白雨やみ勝手口より猫の顔
鬼灯の鉢の軽さや秋の風
老梅や衣破りて龍となる
●S54 卒　豊澤空豆

多摩河原翼竜滑空大西日
蝉しぐれデモを見ていた聖橋
浅き春貝の想いを聞く人よ
●S50 卒　和田芝女

初蹴りのガッツポーズに母の笑み
重箱の赤飯見つけ初笑顔
大根の染み入る味に初笑顔
●S62 卒　重光桜子

吾も亦素餐の徒なり半夏生
熊蝉の声絶えたりし六日かな
淋しさや机に林檎ひとつ置く
●S52 卒　神崎峻坊

あっはっは赤い手袋駆けていけ
憧れは天を廻るやゆりかもめ
同窓会雪持ち笹のここに在り
●H06 卒　市川ねこむすめ

連絡先　岡崎洋（S37卒）
松田欣末子（S52卒）
坂田晃一（S50卒）
長尾みどり（S53卒）